



ミニだんじりの上で太鼓をたたく少年

### 岸和田 だんじり会館 (岸和田市)

## みゅ〜 ザ・見遊じあむ

..... 12



た。ダイナミックな山車の曳行は全国にその名が知られています。南海電車の岸和田駅から駅前商店街を抜けて、市役所を過ぎ、岸和田城が見えたところに、岸和田だんじり会館があります。このだんじり会館には、だんじりと祭りのすべてが詰まっています。

「いわんばかりに、見つめています。各地域のハッピー提灯もズラリと並んでいます。岸和田には大阪府下最高の、80台を超えるだんじりがあります。これらのだんじりを造り、修理、維持する大工、彫り物など、伝統の工芸技術も健在です。館内には、いつまでも軽快でテンポのいいだんじり囃子が鳴り響いていました。

**ミュージアムメモ**  
▶所在地/岸和田市本町11-23▶開館時間/午前10時~午後5時 休館日/毎週月曜日・年末年始▶入館料/大人・600円、小学生及び中学生・300円、岸和田城(郷土資料館)、自然資料館と合わせて3館共通券は700円でお得です▶交通/南海本線岸和田駅から徒歩15分、蛸地藏駅から徒歩10分▶問い合わせ/072-436-0914

## 300年の伝統と 庶民のパワー

毎年9月、敬老の日直前の土・日の2日間(山手は体育の日直前の土・日)は泉州最大のまつり、「岸和田だんじり祭り」です。江戸時代中期、1703年(元禄16年)に始まり、およそ300年の伝統を誇るだんじり祭りは、この地で生まれ育った庶民の手で今日まで受け継がれてきま

います。大型マルチスクリーンによる、だんじり祭りのようすが画面いっぱい広がります。スクリーンの前には実物のだんじりがドーンと構えています。「体験コーナー」では、子どもたちが、ミニだんじりに群がって、鉦や太鼓を力一杯打っています。順番を待つ子どもたちが「早く交代し

## 「紙屋悦子の青春」



今年の4月に75歳で亡くなった黒木和雄監督の最後の映画が「紙屋悦子の青春」です。黒木和雄監督といえば、「父と暮らせば」「美しい夏キリシマ」など、一貫して戦争の理不尽さや悲惨さを、当時の日常生活から描いてきました。この映画もその一作。映画の舞台は戦争末期の1

## 戦争を静かに告発する 黒木和雄監督の遺作

945年春。兄夫婦と暮らす紙屋悦子は明石少尉に思いを寄せていました。が、兄が悦子に持ってきた縁談は、明石少尉の友人の永与少尉でした。そして、明石少尉は悦子に手紙を残して、特攻隊の一人として飛び立っていきました。この映画でもそうですが、黒木監督の作品には戦争を描いても戦闘場面はほとんどできません。反戦や平和を声高く訴える手法ではなく、当時の人々の日常の暮らしや会話を静かに撮りながら非人間的な戦争の恐ろしさを見る者に伝えていきます。大阪では9月2日から、「テアトル梅田」などで上映中です。

## 大阪の戦跡を歩く

第11歩

### 「大阪砲兵工廠」跡

(大阪市中央区)

### 大阪城公園は 軍需工場の拠点



軍需工場のあとを示す碑

大阪城公園は、スポーツ、散策、イベント、パフォーマンスなど大阪府民の貴重な憩いの場です。しかし、戦前は、大阪城外堀から大阪ビジネスパーク、森ノ宮の公団住宅あたりまで軍需工場が広がり、一般人は足を踏み入れることができませんでした。この一帯

にあった陸軍直属の兵器製造工場だった「大阪砲兵工廠」は1870年(明治3)に明治政府が設置したのに始まり、大砲、爆弾、戦車、自動車、飯ごうなどを作っていました。広さは約40万坪。6万人が働いていたといわれます。この「大阪砲兵工廠」も1945年8月14日の大空襲ですべて破壊されてしまいました。いま、大阪城ホール南側の植え込みのなかにその碑が残っているだけです。

## 河内 和泉 おおさか 三國誌

12  
(四條畷市)

### 四條畷の戦いと小楠公

小楠公とは、建武の中興の忠臣・楠木正成を大楠公と呼ぶのに対して、子の楠木正行(くすのき・まさつら)をさしています。

四條畷市内から東に、なだらかな、ご飯を盛ったような低山があります。飯盛山(314メートル)です。14世紀中ごろの南北朝の動乱期、この飯盛山から四條畷にかけて、壮絶な戦がありました。「四條畷の戦い」です。楠木正行は父の遺志をまもり、南朝方の武将として活躍しました。最後の決戦に向けて、奈良の吉野山・如意輪寺の扉に「かえらじと／かねて思え



飯盛山の山頂に建つ楠木正行の像

ば/あずさ弓/なき数に入る/名をぞとどむる」と生きて帰らぬ思いを記しました。そして四條畷で北朝方の足利の武将・高師直(こうの・もろなお)率いる6万の大軍との合戦に臨みました。時は1348年1月5日のことでした。このとき楠木正行23歳。多勢に無勢のなかでよく奮戦しますが戦死します。市内にある四條畷神社はこの正行などを祭っています。楠木父子にゆかりのある四條畷市には、「楠公」という住居表示の地名があります。

## いまも心に響く 名詩・名歌・名語録

「人生意気に感ず、  
功名誰かまた論ぜん」  
『述懐』魏徴

「人生は意気に感じて立つもので、人間はお互いに意気に感じるところがあればいい。功名など論ずべきものではない」の意。『述懐』は魏徴(ぎちよう)の編んだ詩集。魏徴は、中国・唐の政治家で、皇帝の太宗の側近として尽くしました。唐の国が興るとき、魏徴が学問をおいて馳せ参じたときの心情をうたったもの。実際、魏徴はその後も唐の皇帝につかえ、自分の命が危なくとも、意気に感じるところは皇帝に直言したといわれます。

『坊ちゃん』と  
『草枕』  
夏目 漱石

漱石の名作『坊ちゃん』『草枕』が発表されたのは今からちょうど100年前の1906年でした。冒頭のつぎの書き出しが有名です。「親ゆずりの無鉄砲で、子どものときから損ばかりしている。小学校にいる時分、学校の2階から飛びおりに一週間ほど腰を抜かしたことがある(坊ちゃん)。「山道を登りながらこう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくにこの世は住みにくい」(草枕)